

架蔵写本『鎌倉大草紙』紹介と翻刻（四）

田 口 寛

要 旨

本稿は、梅光学院大学日本文学会『日本文学研究』や『論集』四五（本誌前号）に連作として掲載している拙稿「架蔵写本『鎌倉大草紙』紹介と翻刻」の第四篇である。本稿においては、諸本中、架蔵写本と特に近い本文と見られる池田可軒本・坂田本・北海大本との関係をより詳細に取り上げ、これらの中では、前稿に略記したとおり架蔵写本と池田可軒本・坂田本が総じて近く、次いで北海大本が近いことを改めて確認した。

キーワード 鎌倉大草紙 軍記 室町軍記 後期軍記

はじめに

本稿は、梅光学院大学日本文学会『日本文学研究』や『論集』四五（二〇二二・一。本誌前号）に連作として掲載している拙稿「架蔵写本『鎌倉大草紙』紹介と翻刻」の第四篇である。軍記（室町軍記・後期軍記）『鎌倉大草紙』の架蔵写本について、本稿（四）に

は第四一丁オモテ第二行から第五五丁ウラ末行までの約一五丁分を収める。

今回、本稿において翻刻した部分については、諸本中、架蔵写本と特に近い本文と見られる本との関係を、本稿の翻刻範囲外も含めながらより詳細に取り上げておきたい。

一 本稿翻刻部分を中心とする本文特徴

前稿第一篇(二〇二・一 『日本文学研究』四七)において稿者は、架蔵写本と池田可軒本・坂田本・北海大本とが、これらの属する所謂「二巻本系統」(彰考館本系統)の中でも同類であることを指摘し、さらにその注(2)において、「取りわけ、三本の中では前二者に近い」とごく簡略ながら記した。その特徴的要素を、前稿第一篇(本誌四五)に紹介した箇所以外で、以下に列举する。

①(一九ウ七行)着候上者、御堂殿・持仲公者不承上命候事、明白候也。(前稿第二篇翻刻部分) ※句読点等は稿者による(以下同じ)。

例①の波線部は、諸本の中でも架蔵写本・池田可軒本・坂田本にしか見られない¹⁾。

②(四九ウ九行より)同時に供に來、椎名与十郎胤家・木内彦十郎・円城寺又三郎・米井藤五郎・栗飯原助九郎・池田助十郎・深山弥十郎・岡本彦八・青野新九郎・多田孫八×三谷新十郎・寺本弥²⁾・中野与十郎等、皆指違く枕を並て伏居ける。

例②は、架蔵写本・池田可軒本・坂田本のみ欠脱があり、他本にはいずれも×印部分に「高田孫八」が加わる²⁾。

③(五二オ一一行より)其後胤貞上洛して吉野へ參、征西將軍の宮御下向の時御供して九州へ下り、大隅守に補任し×肥前国

松王山を建立して、総州の中山を引て末々の世迄此所を中山と両山一寺と号す。

例③は、これは架蔵写本・池田可軒本・坂田本及び北海大本に同じ欠脱があり、他本にはいずれも×印部分に、「肥前国をも知行しけり。日祐上人も九州に下向して」という本文が入る³⁾。

④(五三ウ四行より)成氏より武田右馬助・里見・築田・一色宮内大輔×⁴⁾等に三百余騎を指添、埼玉の城を責らる。

例④は、架蔵写本・池田可軒本・坂田本のみ欠脱があり、他本には×印部分に「鳥山」が加わる。また一方で、他本には「⁵⁾」に相当する文字が見られない。

以上から、総じて架蔵写本と池田可軒本・坂田本が近く、次いで北海大本が近いことが改めて確認されよう。坂田本・池田可軒本の書写年代については、それぞれ坂田諸遠(二八一〇〜九七)・池田可軒(一八三七〜七九)の入手より以前であることを蔵書印から推察するのみであるが(さらに遡る印はなく、書写は入手の数年前か)、両本の装訂がほぼ瓜二つ(一面二行、上冊墨付三五丁・下冊三二丁、緑色地に小葵文様艶出表紙など)であることを重視して、同時期同所の書写と仮定すると、概ね一八三〇〜四〇年以降であろうか。架蔵写本は一八三四年以前と確実にいえる点、三本の中では最も注意されよう。

二 架蔵写本『鎌倉大草紙』翻刻

(翻刻凡例は前稿を参照されたい)

【翻刻本文】

一 武田信長は代々鎌倉の近習成けるか此時分京都に有／合結城合戦の時京都勢相伴ひ下向して京都勢と／一同に高名して其後の忠賞として曾比千津／島を拝領す此所は故花峰入道鎌倉へ出仕の時〔の〕中／宿の所也先祖の跡かうはしく此所に居住して暫く／安堵しけるか成氏関東御帰参の最前に馳参代々／関東奉公の儀を申ければ御感有て近習にて有けり／扱又甲州は京鎌倉動闘付いまた守護代も不被／仰付之間西郡は逸見押領にて中郡東郡は跡部上野／父子押領して己が儘に有けるか斯て公方の御咎に(41オ)預り悪かりなんと存其頃道成入道牢人にて信長に／扶助せられ武州府中に有けるをまねき主と名付置／国は一向己がまゝに振舞けり其時分結城合戦有て〔て〕の左傍に「◆^(こと)さ」／道成入道は刑部大輔と号し結城の城震の方より／責入一方の隊将結城七郎か首を討取京都へ進上し／ければ京都より甲州の守護下されける間跡部駿河同／上野を打取て自ら国を治ける果報難有人也跡部駿／河同上野は本主の信長を背き輪宝一揆の衆をかたら／ひ日一揆の衆を亡し信長を追出し主の知行を／押領しけるか牢人の道成を詔き人名をは主と名付な／から狂言

者のてつしをもてあつかふ如く心のまゝにて(41ウ)有しかとも天罰にて終に子孫迄亡ひ果ける刑部大輔／入道は宝徳二年十一月廿四日に逝去す法名功嶽成道と号す／俗名信重也管領上杉右京亮憲忠名代として長尾／左衛門入道景仲威勢を振ひ八州彼名字中三家あり／上州白井の長尾上州佐貫の長尾越後の長尾等也先／年江島合戦の時成氏^{江島}○対して彼等か一味の者とも／数輩本領を没倒せられ其後和談寛免の間本領／返し可被下由憲忠頻に訴^訴詔申されけれ共成氏御免／なかりけり是に依て皆々分国の一揆彼官人等を召／集猶以致噉訴といへとも御許免なし近年は寺社旧／付の庄園をおさへて家人とも令恩補去程に国々(42オ)所々より詔止事なし騒動着劇関東の大乱と見へけれ／とも成氏より憲忠に下知有て雖被加折檻更に是を／用ひす如何様東国の大事此時にありとや思ひけん／憲忠の舅扇谷入道道朝長尾左衛門入道昌賢ひそ／かに上州より下り一味の族を催し種々の斗略を／廻らしける此日頃御所方管領方とて二にわかれ不快／にて有し御所方の人々馳集上杉長尾〔等〕の隠謀已に／発覚せり暫くも油断に及は味方の一大事成へ／し急速憲忠を退治して関東をしつむへしと／成氏を勧め申ければ公方も元より鹿^鹿幾する所／なれば尤と悦ひ給ひ結城中務大輔成朝武田右馬助(42ウ)信長里見民部少輔義美印東式部少輔等三百騎相催／し享徳三年十二月廿七日の夜鎌倉西御門館へ押／寄て時を作る憲忠も俄の事にて用意の兵も／なかりければ無左右乱入ける程に憲忠主従廿二人切／先を揃へて切て出防戦けれとも不叶して一人も不残／討死す憲忠の首結城の氏朝家

人(「家」の字は「の」に「家」を重書)金子祥永同弟／祥賀討取て御前へ参実檢に備へける憲忠管領職なれ／は庭上に置へからすとて畳を敷其上に祥永兄弟／をすへられ御実檢の後金子に多賀谷と云名字を／下され常陸国にて所領数多給り此子孫代々の家老／となる公方へ出仕の時陪臣なれ共庭上に畳を敷公方へ(43才)拝顔申けるは此時の例也同廿八日御所勢山内を追捕去程に／上杉修理太夫入道持朝長尾左衛門入道太田備中守入道其外／一味の兵一千余人しまかはらに寄来後陳の勢を待居ける／勝長寿院殿は成氏の御弟にて御所方の最なりしか／敵より何とかすかし申けるにや鎌倉を落て日光山へ御移し／敵と一味にて衆徒を催さる成氏より武田右馬助一色／宮内大輔鎌倉を立同廿二日押寄時の声をつくる上杉方^は／鎌倉勢少勢にてかく寄来るへしとは思ひもよらず／油断して有ける所へ不意に攻来ければあわてふため／き騒動しけるを鎌倉勢是に理を得て三方より火急／に責寄ける間上杉方忽打負悉敗軍して上州と川(43ウ)越と両方へ引返す長尾入道かくては叶ふましと思ひければ／越後の守護上杉定昌、上州へ詔き憲忠の弟房頭を／取立大将として越後信濃武蔵上野其外東八州の内／上杉一味の軍兵又故禪秀か子息上杉右馬助憲願扇谷持／朝入道にも評定して京都へ申御教書御幡を申／おろし成氏退治の謀を廻らす成氏も以專使京都へ申／されけるは憲忠事不儀逆心の間無抛退治いたす所也／京都へ奉対毛頭不儀を不存京公方の御領分一所もいろひ／をなし不申殊に足利の庄は御名字の地にて候間御代／官を被下可有御成敗之間再三被申上けり然といへ共

御檢／使を被下関東の様体嚴密の不及御沙汰た、成氏か私の(44才)宿意を以憲忠を討殊に不得上意して関東の大乱(を)起す条不儀の至也とて終に御勘氣を蒙り成氏退治可／有由被仰出ける成氏は上州の敵退治のため正月^{十五}五日／鎌倉を立武州府中へ一千余騎にて発向して高安寺／に陳を取是を聞て上杉勢二千余騎にて上州を打立て／享徳四年正月廿一日武州府中分陪河原へ寄来る成氏／五百余騎にて馳出短兵急にとりひしき火出る程に／攻戦ひける間上杉の先手の大将右馬助入道憲願深手を負／引兼ねる(か)高旗寺にて自害す鎌倉勢も勝軍はしけれ／とも石堂一色以下百五十人討死して戦つかれ分陪河／原に陳をとる上杉勢の荒手の兵五百余騎同廿二日分陪(44ウ)河原へ寄来時の声を上ければ成氏昨日の合戦に打勝／勢ひゆゝしき兵者(とも)なれば敵の寄るとひとしく出合／散々に切てかゝる上杉(方)の先陳羽統大石以下悉く打負／討死敗軍す成氏勝に乗て責入ける間里見世良田深／入して討死しける是を事ともせず結城小山武田村／上入替て攻ける間上杉忽打負悉敗軍す扇谷房頭は／後陳にうちけるが味方をいさめきたなし返せとて／ふみ留りて防戦ひけれ共大軍のなひきたる事なれば／引返し留る兵は(は)の左傍に(○)なく我先に落行けり頭房手の／者皆討れ深手負けければ夜瀬と云所に残留りて廿一／歳にて腹切て死ぬ成氏は兩日の軍に勝給へは降参の(45才)敵数を知らず上杉長尾敗軍の兵を集常陸國小栗の／城に立籠享徳四年閏四月成氏御進発あり結城に／御馬を立られ小田築田筑波小山下野守を指向て彼／城を被攻上杉衆も出合数

日合戦止時なし此陳中に／小田持家の子息朝久父に先立て病死早世しければ／父中務は愁歎の余りに今においては合戦も無益也とて／引返す是を聞て成氏より重而荒手を入替大勢にて／責ければ終に小栗の城を責落され上杉方悉敗軍／して野州へ向て落行けり然といへ共京都の御下知不／等閑の間千葉介入道常瑞同舎弟中務太輔入道了心／宇都宮下野守等綱山川兵部少輔眞壁兵部太輔等上杉（45ウ）と一味して所々に蜂起しける就中此宇都宮等／綱は去、応永の頃小栗逆心の一味に同心し逆意を企／塩谷に打れし右馬頭持綱か子也其時四才にて佐竹へ／落行けるを十九才にて御免を蒙、本領に安堵し／けるが父が恨をや思ひ出ける、や今度も最前に敵／となりて籠城す成氏も他の敵を押置自身押寄／城の四辺より一人ももらさしと攻ければ芳賀伊賀／守紀清両党の兵を引卒して宇都宮惣領弥四郎／明綱は小山持綱（綱）の字に「○」を重書、その左傍にも「○」か甥なれば是をたのみ宇都宮の家を／絶さしとて成氏、降参いたさせける等綱は息男／明綱、芳賀伊賀守以下降参の上は防戦ふに便なく（46オ）籠城叶ふへき様あらざりければは家人入道して黒衣を／着し城を出奥州白川へ落行ける山川の城真壁の／城も責落されていつれも成氏へ降参す然とも京／都に御沙汰有て海道五ヶ国の勢今川上総介を大将／として御旗を被下鹿王院被相添同年の六月十六日／鎌倉へ乱入御所を初、として谷七郷の神社仏閣を追／捕して悉焼払頼朝卿の以後北条九代の繁昌は元弘／の乱に滅亡し尊氏公より成氏公の御代に至て六代／の相統の（は）に「の」を重書）財宝此時皆焼

亡して永代鎌倉亡所と／なり田畑あれはてける誠にあさましき次第也去程、／越後の守護上杉民部大輔定昌上州へ打越兵部少輔房頭（46ウ）を取立越後信濃の軍勢を催しける長尾左衛門入道／昌賢武州上州の軍兵を催し上杉八郎藤朝同名／斤鼻和六郎同七郎憲朝野州天命只木山に立籠、／成氏退治の謀を廻らしける又下総国千葉介入道常瑞／舎弟中務入道了心日比は鎌倉の侍所にて成氏へ度々／の忠節ありしか此兄弟故上杉禅秀が外孫也今度／禅秀子息右馬助憲顕下向して勤ければ母方の叔父と／一味して成氏、敵をなす成氏天命只木山／押寄四／方口々の用路を指塞遠責に責給へは兵糧運送の道／なくして越後上州の兵とも一戦にも不及忍ひ、に／落行けり長尾不叶して両国の一揆を集め武州騎西（47オ）領へ引退て陳を取る成氏は総州葛飾、郡古河県かう／のすと云所に屋形を立閑宿の城に築田を籠野田城、／野田右馬助を籠置猶武州甲州相州両総州の味方を／集め又騎西領へ発向して上杉長尾を退治して関／東をおさめんと打立て京都へは瑞泉寺西堂を使節／とし京都に對し奉り不儀不令存憲忠を令誅伐、之事を御免被成候におひては自今以後○無、二之忠勤候／毛頭も不、野心候所に讒佞等申乱間被差下御勢候／伏願は御敵に成事歎に余り有被下淳直之御使節候間／関東の次第初よりの儀御檢知御座候は、寔以可為都／鄙安泰の基よし言上有けれ共御返事も不被仰下（使僧も空して下りけり）享（47ウ）徳四年六月成氏為退治上総介範忠京都の御教書を／帶し御旗給東海道の御勢を引卒鎌倉へ発向す／鎌倉には木戸大森印東里見等離山、待かけ防戦ひ／けれ共

悉打負ければ成氏重て新事の勢二百余騎を指防けれ共敵勢雲霞のこくと重りければ終に不叶／武州府中へ落行路次之世谷さいと申所にて南一／揆蜂起して待かけたり築田河内守結城先陳／にて是を散々かけ破り道を開き成氏は武州／菖蒲に落着敗軍の士卒を集め総州下河部の城／に被籠此時の事にや鎌倉在柄天神の社檀を破り／駿州之軍兵等天神の神体を駿府へ乱取しける(48オ)とかや其後神体自ら荏柄へ御帰りの事あり爰に／千葉介か近親に原越後守胤房同筑後守胤茂円／城寺下野守尚任と云者あり共に有勢の兵也中も／原越後守は武功の兵にて公方へも出仕しければ／成氏より原越後守を頼に御頼有ける越後守は／千葉介を勧て御方に成り給へと申円城寺下野守は／上杉にかたらはれければ同心の族を催し千葉介を／勸めける間千葉介父子兄弟上杉と一味して御所／方を背きければ原ひそかに成氏より加勢を乞亨／徳四年三月廿日千葉へ押寄ければ俄の事にて／防戦叶ひかたくして千葉城を没落す胤直(48ウ)父子は同国多胡志摩の二城に楯籠一味の勢を催し／上杉よりの加勢を待居たり爰に又故千葉大介か二男／千葉馬加陸奥守入道常輝父子馬加より討出成氏／の味方と成て馳来る原越後守大に悦ひ則是を大／将として多胡の城へ差向原は志摩の城へ押寄て攻／ける程に陸奥守入道は古兵にて城を取巻兵糧の／道をとめ一方を明て攻ければ籠所の兵皆落失て／大将胤宣若年にて纔に甘騎斗(甘)なり(本行の「な」の字は「て」に「な」を重書)終に攻落／され乳母子の円城寺藤五郎直時を以敵陳へ達し／城をは渡し可申候間仏前へ参切腹仕度よし乞けれ

／は尤とて城を請取寄手[#]公方よりの加勢の兵とも(49オ)送て城外のむさといふ所に阿みた堂のありけるへ／出仏前に向ひ亨徳四年八月十二日十五才にて切腹阿弥／陀堂の別当来照院出合焼香(焼)統経す最期のつとめ／念頃也直時も主の介借してつゝひて腹を切にけり／みた頼む人は雨夜の月なれや／雲はれねともにしへこそゆく／

辞世／

見て歎き聞てとふらふ人あらは／

我にたむけよ南無阿弥陀仏／

同時に供に来権名与十郎胤家木内彦十郎円城寺／又三郎米井藤五郎栗飯原助九郎池田助十郎深山／弥十郎岡本彦八青野新九郎多田孫八(高田孫八)三谷新十郎(49ウ)寺本弥^(彌)中野与十郎等皆指違／枕を並て伏居ける／首とも取て成氏へ進上す又志摩の城は原越後守／大将にて昼夜の境もなく攻戦けるが同八月十四日の夜／終に不叶責落され是に土橋と云所に如来堂の有ける／所へひらき别当東覚院に籠る原越後守城を／請取彼寺を取巻て胤直^{胤直}付申ける上臈を招き／出し申けるは介殿御事は成氏公へ御不儀^{不儀}て討手／被遣ける間上様(の)御心難申候へは不及力若君の胤宣は／初より御一所に無御座何の不儀もおはします馬／加殿あわれに思召候間如何にもして御命を助^助奉り／候はんと申然とも胤宣ははや十二日に御切腹のよし(50オ)越後守も涙を流しける同八月十五日寄手重り如来堂／を取巻時の声をつくりける間千葉介入道常瑞舍弟／中務入道了心腹切け

れは池田豊後守胤相介錯して／同是も切腹す円城寺因幡守木内左衛門尉池田蔵人／多田伊予守栗飯原右衛門尉高田中務太輔胤行等は胤直／の御前^{上臈}を初女房達を差殺し思ひ／に腹を／切哀といふもおろか也別当東覚院に死骸を集め／仏事供養をなし無常の烟と焼上げる原筑後守／胤茂か沙汰として骨をは千葉の大日寺に送^り納め／五輪石塔を立置ける是は敵ながら譜代の主なれば／ヶ様に吊ける事情有と諸人感しける爰に哀なる事(50ウ)有下総国金剛授寺の僧中納言坊とていと若き僧有／能書にて胤宣おさなき時より手習の師にて有けるが／胤直父子切腹のよしを伝聞吊のために彼如来堂へ／参詣して御経を誦念仏焼香しける別当東覚／院は出合胤宣父子最期の体物語して辞世の歌を／取出し見せければ彼中納言此哥をみて涙を流し／其儘又仏前へ参御堂の柱に一首の歌を書付て出ける／か其近辺の(「の」の左傍に「〇」)あたりの流水の深き淵に身を投て終に／空しく成にけり／

見るもうじ夢になり行草のはら／

うつゝに残る人のおもかけ(51オ)

此千葉介は平将軍^{頼朝}五郎重門の末葉にて右大将頼／朝の御時当家の先祖常胤は鎌倉へ無^二の忠節有て将／軍より(御)崇敬あり官加階はあらされ共諸家の上座に／列し一男千葉／新助^二一男相馬／小次郎三男武石／三郎四男／大須賀／四郎五男国分五郎六男東／六郎大夫胤頼とて／東／庄三十三郷を知行し代々歌人にて禁中の御会^二／も参ければ子孫代々在洛す常胤より五代の後胤に／時胤は(在)鎌倉にて死

去す六代頼胤のとき総州小金に／居住す此時鎌倉の極楽寺の良観上人を請て小金の／まはしと云所に大日寺を建立して頼朝公より代々／の將軍^若千葉の一門の菩提を祈る貞胤の時此寺を(51ウ)千葉へ移す然とも大日五仏の尊像は良観自作^し／給ひし靈仏にて威力新にして猶此処に残^り給ふ間／其後貞胤氏胤当所に在城の頃尊氏將軍の御菩提の／ため夢想国師の御弟子古天和尚を請し此寺の／中興開山となし号万満^{頼朝}寺此時宗胤は三井寺にて／討死し貞胤は北国落迄は宮方にて新田義貞の御供^り而／有しかとも不心して尊氏の味方になりける間宗胤の／子息胤貞宮方にて千葉に残り給ふ此人の子息日祐／上人法花宗学匠にて下総国中山の法花経寺の中興／開山なり是により胤貞より中山の七堂建立あり五重の／塔婆をたてらる其後胤貞上洛して吉野へ参征西(52オ)將軍の宮御下向の時御供して九州へ下り大隅守に／補任し(肥前国をも知行しけり日祐上人も九州に下向して)肥前国松王山を建立して総州の中山を／引て末々の世迄此所を中山と両山一寺と号す扱また／貞胤の子孫千葉へ移り此胤直迄五代也尊氏の御時／千葉の家二方に分れ宮方將軍方とて有しが宮方は／九州へ下り其後終に下総へ渡り給はず関東は一流にて／有けるか今度又馬加は成氏公と一味して原是を主と／して千葉へ移^り千葉の跡を継げる其後原は小金／の城に居住す上杉より今度胤直と一所に討死有し／中務入道了心の子息実胤自胤二人を取立下総国市川の／城に楯籠る千葉又二流となる同七月廿六日改元ありて(52ウ)年号を康正元と改む爰に其頃京公方の近／臣東下野守常縁と

云人有是は昔の常胤の六男東ノ／六郎大夫胤頼か嫡流也総州東の庄を知行しなから／代々公方の近臣歌人にて在京して有けるが今度ノ千葉の家両流になりて総州大に乱れければ急ぎ／罷下り一家の輩を催し馬加ノ陸奥守を令退治／実胤を千葉へ移し可申由御下地を蒙り御教書ノを帶し下向す浜式部少輔春利をも相具し下向／して一族并国人に相触ければ国分五郎大須賀相馬ノを初として下野守常縁に相隨ふ其勢を合て常ノ縁馬加の城へ押寄せ散々に攻ければ原越後守打て出一日(53オ)一夜防戦けれども終に打負千葉をさして引退此勢ノひにて上総国所々にむらかりて有ける敵城自落せ／しかは浜式部少輔をは東金の城へ移し常縁は東ノ庄へ歸る成氏より武田右馬助里見築田一色宮内ノ大輔〔鳥山〕^(尾カ)等に三百余騎を指添埼西の城を責らる上杉ノ斥鼻和長尾左衛門武州七党の兵とも康正元年ノ十二月三日切て出防戦ひけるに上杉方打負引かへしける／同六日御所方より押寄手いたく攻ければ終に城を／責落す上杉衆数百人打死敗軍す然とも総州の合ノ戦に馬加陸奥守原越後守東ノ野州常縁に度々打ノ負けは千葉ノ新介実胤を取立本領を安堵させん(53ウ)と市川の城に楯籠て大勢有よし聞へければ成氏ノより南園書助築田出羽守其外大勢指遣数度合戦ノして康正二年正月十九日終に城を責落し宣胤はノ武州石浜へ落行自胤は武州赤塚へ移る南総州のノ兵ともは大半成氏へ降参申ける関東八州所々にて／合戦止時なく自ら修羅道の岐となる人民耕作をノいとなむ事あたわす飢饉して餓死に及ふものノ数を知らす上総国人は武田入道打入て斥南の城まりノか谷の城両所を

取立父子是に楯籠て国中を押領すノ房州の里見是に力を得て中村の城より起りて国ノ境へ勢を出し所々押領す築田河内守関宿より(54オ)打て出武州足立郡を押領し市川の城をとる上ノ杉方にも三浦介義同は三浦より起て相州岡崎の城ノを取る近郷を押領す大森^(安業)斎入道父子は竹下より起てノ小田原の城を取立近郷を押領す又敵方は武蔵国^ニはノ上杉武蔵入道性順息男右馬助房頭は武蔵の人見^五ノ打て出上州の味方と引合深谷に城を取立ける成氏ノ是を聞て敵に足をためさせしとて同十月十七日ノ鳥山右京亮高因幡守等を先かけにて二百余の勢をノ指遣わす上杉方岡部原へ出合火出る程に戦ける上杉方にノ井草左衛門尉久下秋本を初として残少に討なされノ悉く敗軍す成氏の味方も勝軍にはしたりけれども一(54ウ)方の大將鳥山深手負死しければ本陳へ引かへす上杉方へノ上州より新田ノ岩松小次郎金井新左衛門以下荒手加^リければノ上杉衆力を得て羽統原へ出張して陳をとり公方衆ノ是にかけ合一度目の軍に打負足立郡へ引退下総国^ニはノ東野州常縁と馬加陸奥守ノ岩橋輔胤と所々におゐてノ合戦止時なし扱又京都には御沙汰有て常縁を召上せノられんため長録元年六月廿三日渋川左衛門佐義鏡^七をノ大將として武蔵国へ被差下是は公方の近親にて代々ノ九州探題の家なれば諸家も重き事に思ひけるうへノ祖父左衛門佐義行は久敷武蔵の国司にて有其時よりノ足立郡に蕨と云所を取立居城^ニして今に至るまで(55オ)此所を知行しければ旁此仁可然とて義鏡を探題ノになし給ひ御下知の通武州の兵ともは申聞せ成氏をノ退治して上杉を管領として関東を可治之趣を触ノ

渡す板倉大和守先立て罷下此由を申ければ上杉方の兵／とも各馳集
渋川殿へ参会して京公方の御下知を承り／其年長録元年四月上杉修
理大夫持朝入道武州河越の／城を取立らる太田備中入道は武州岩槻
の城を取立同左衛門／太夫は武州江戸の城を取立ける成氏其同年の
十月総／州下河部古河の城普請出来して古河へ御移有ける／京都よ
り渋川探題にて下向あり武蔵相模の兵を集／東の常縁両総州の兵共
を下知しけれども東国の兵とも(55ウ) (未完)

注

(1) 当該本文は、上杉禪秀の乱における今川範政廻状の一部。その原
資料となった文書と同種のを写したらしい国立国会図書館蔵
『結城古文書写』所収文書にも、波線部は見られない。

(2) なお、彰考館本系及び類従本は、「……粟飯原助九郎・池内助十
郎・深山弥十郎・鬼本(「鬼」は類従本空格)彦八・青野新九郎・
多田孫八・高田孫八・三谷新十・寺本弥七……」とし、傍線部が
異なる。それに対して、架蔵写本・池田可軒本・坂田本・北海大
本及び村上本・東博本系統は、この一群内において合致している。
ただし、村上本・東博本系統のみは、「寺本弥七」が「寺本弥七
郎」。

(3) 村上本・東博本系統にも欠脱がない。例②や③から判断すると、
前稿に指摘する、東博本系統が部分的に架蔵写本・池田可軒本・
坂田本・北海大本の一群に近いという現象は、取りわけ北海大本
が近いが、一群との接近自体があくまで部分に留まることになる。

付記

本稿は、科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)・若手
研究(B)／課題番号：JSPS科研費24720112による成果の一
部である。